

坑夫

映画文学人生論

原作：夏目漱石 (1908) 「朝日新聞」
参考：原作：五木寛之『青春の門』筑豊篇 (1975)
監督：浦山桐郎 脚本：早坂暁 浦山桐郎
出演：伊吹信介 田中健 撮影：村井博
伊吹重藏 仲代達矢 音楽：真鍋理一郎
伊吹タエ 吉永小百合 牧織江 大竹しのぶ

本当の事が小説家などに書けるものじゃないし、書いたって小説にならない

『坑夫』は朝日新聞に入社した夏目漱石が『虞美人草』の次に連載した小説だが、新聞小説にしては読者へのサービスが不足している。言いかえれば、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』のような通俗的な笑いの要素がとぼしい。

あまり期待できそうもないので、私も敬遠していたが、『文学論』を読んでから気が変わった。文学とは何かとか、文学は人生に必要なと考える読者には『坑夫』は面白いかもしれないと———と思っ直した。

主人公は二人の女との恋のもつれに嫌気がさして東京の自宅から家出した十九歳の若者。中以上の家庭で育ったお坊ちゃんだが、「真っ直ぐでよい御気性」とか「親譲りの無鉄砲」とか性格がわかるような描写はまったくない。

それどころか、本人自身が「性格なんてものはないものだと考えている」などという。「よく小説家がこんな小説を書くの、あんな性格をこしらえるのと云って得意がっている。読者もあの性格がこうだの、ああだのと分ったような事を云っているが、ありや、みんな嘘をかいて楽しんだり、嘘を読んで嬉しがってるんだらう。本当のことが小説家などに書けるものじゃないし、書いたって小説になる気づかいはあるまい。本当の人間は妙に纏めにくいものだ。神さまでも手古ずるくらい



坑夫——映画文学人生論

纏まらない物体だ」。

なるほど、その通りかもしれない。この若者の小説観は考えさせられる。しかし、これが十九歳の若者の発想だろうか。また、「この一篇の『坑夫』そのものが、小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭くなくて好い心持ちだ」とか「『坑夫』は纏まりのつかない事実を事実のままに記すだけである。小説のように拵（こしら）えたものじゃないから、小説のように面白くはない。その代わり小説より神秘的で」などと小説の手口を述べている箇所もある。

文体は語り手である主人公の意識に次から次へと浮かんでくることをそのまま記述するスタイルのようだが、ところどころに主人公ならぬ作者の意識が入り込んでいる。

作者は『文学論』を研究した四十歳の漱石、その意識がいつのまにか十九歳の若者の意識に入りこんで、文学論を展開している。これでは『文学論』の読者には面白いかもしれないが、一般読者向きではないと思う。

映画化されたこともないので、その代わりに、坑夫の登場する映画を探すと、五木寛之原作『青春の門』があった。ただし、筑豊炭田の事故の様子やボタ山の風景が描かれているが、主人公が坑夫になろうとする話ではない。

坑道のそこは地獄の三丁目